

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	難易文その他の位相論的考察
Auther(s)	田原, 薫
Citation	ニダバ , 15 : 1 - 11
Issue Date	1986-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047171
Right	
Relation	



難易文その他の位相論的考察

田 原 薫

§ 1. 序論 (位相論的統語観の枠組)

難易文、或いは(変形文法で言う)「tough構文」は古くから度々取り上げられていて、その議論に決定版というものを見出しにくい問題の一つである。ここではそれを位相論的統語観の見地から論ずるが、この問題を扱うに際して、非能動者主語をもつという構文の特徴を共有する別の構文、たとえば This water is good to drink. や She is pretty to look at. などと同時に扱いはがら、比較検討を進めて行くことにする。

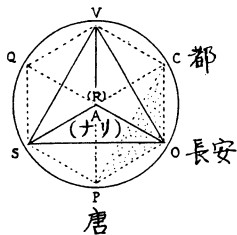
ところで、その前に、位相論的統語観 (topological view of syntax) なるものに馴染みの薄い読者もおられると思うので、今日までのこの思想の歩みと業績を振り返ってみることにする。これらは「NIDABA」第14号(1985)、「言語の世界」Vol.2 No.2 (1985)などに発表されたものである。

まず、位相論的統語観の基本的な枠組が「NIDABA」および「言語の世界」に載った筆者の2篇の論文で提示された。この枠組では、文を構成する構成成分の意味機能を三つの次元に分析し、それらの意味機能をそれぞれの次元に対応する意味機能素性3個の組み合わせで定義されるものと考えた。こうして立方体AQVCA-PSROPが設定され、頂点8個の中から主要な頂点4個を結んで得られた正四面体AVSOも設定され、さらに辞項の読み出しの便宜のためにそれらの外接球も設定された。この構造を文の基本的表現単位と見なし、「clause」と呼ぶことにした〔註1〕。

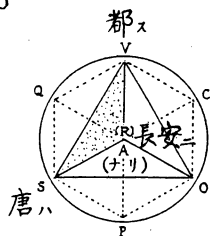
次に、「NIDABA」第14号で、同定文および存在文の統語構造が明らかにされた。「言語の世界」Vol.2 No.2では、漢文における異分析同義の一事例が解明され、それが遠くグルジア語の〈アスペクトの違いによる他動詞文の格枠の違い〉の現象と深い根を共有する現象ではないか、との示唆もなされた。それは概略次のようなことである。

漢文で「唐都長安」という文を読み下す場合に、「唐ハ長安ニ都ス」という読み方と「唐ノ都ハ長安ナリ」というのと、二通りある。これらの読み方は、変形文法流に樹形図に書くと異なった図になる。LFすなわち「論理形式」と呼んで彼らが意味部門への入力と見なしている式においても恐らく事情は同様であろう。ところが、どちらの読み方で読んでも“cognitive”には同義となる。これが変形文法では説明できない。「都ス」という動詞と「都」という名詞の違いをとってみても、事は変形とか移動とかで処理できるものでないことが明らかである。この説明には、意味から形式を導き出す、位相論的統語観の考え方が必要となる。その考え方は、図1aの統意構造を建て、中間的な構造の図1bを経て図1cに至る過程となる。

図1 a



b



c

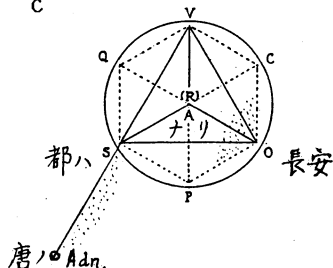


図1 a は統意構造で、「唐のもとで長安が都」という意味にはほぼ対応している。ここにできた△PCOの意味空間をそのまま平行移動して△SVRに嵌め込み、S成分だけを主題化して読み出せば「唐ハ長安ニ都ス」の読みが得られる。図b参照。

図bで、主題と題述の境界線を変更し、「唐-都」のペアと「長安」とに分裂させて図cの統語構造を作ると、「唐ノ都ハ長安ナリ」の読みが得られる。

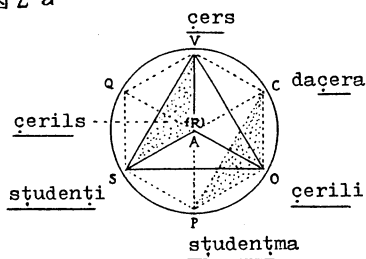
ここで使った操作は決してトリックでもなく、偶然にうまく行ったのでもない。意味機能の写像に使われた空間の各次元がそれぞれ固有の機能をもっているからこそ、平行移動（各辞項の相対的意味関係を変えない）が可能なのである。回転移動は各次元の固有の機能を乱すので、成立しないであろう。

ところで、グルジア語の他動詞文は、完了・瞬間アスペクトでは〈能格+絶対格〉，不完了・継続アスペクトでは〈絶対格+与格〉という格枠組の二つの項を取る。（註2）

- (1) študentma dačera čerili
 学生が（能格） 書いた。 手紙を（絶対格）
- (2) študenti čers čerils
 学生が（絶対格）書く。 手紙を（与格）

能格言語に広く見られるこのような格付与のずれは、また“antipassive”態の現象として知られている。この機構の解明に、先ほどの漢文訓読の問題の際に出た、三角形の意味空間の平行移動が絡んでくる。図2参照。

図2 a



b

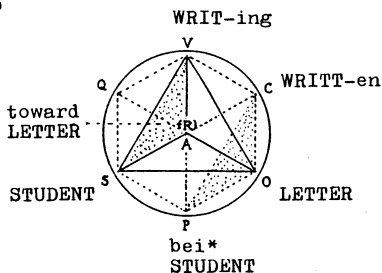


図2 aで、文例(1)の統語構造はPCO配置、(2)のそれはSVR配置、そして両者に共通する意味はその三角形が保持すると考えると、うまく行く。図2 bは図aを概念的・感覚的に把握するために、対格言語である英語に無理やり当てはめてみたもの。勿論正確な対応ではない。P位置のSTUDENTに付された(能格表示のつमोरの)bei*は、ドイツ語のbeiと英語のbyを兼ねたような意味[..の許に、かつその仕業で]である。なおAには時制をもつ繫辞があると考ええる。△PCOのもつ基本的な意味は「学生のもとで手紙が書けた(書き上がっている)」であるから、これは「唐のもとで長安が都」という関係と相同であり、両者を対比させてみると、対格言語の話者である我々にも理解可能であろう。

以上は本統語観の特徴である転送(意味機能素性の変更)という操作が最も効果的に行われた例であるが、能動態と受動態の関係も、共通の両動態的な統意構造からこの転送の考えを使ってエレガントに説明できた。「NIDABA」第14号・および「言語の世界」Vol.2 No.2の筆者の論文を参照されたい。

両動態的な統意構造から受動態の統語構造を作り出す際に、OとCにそれぞれ置かれた名詞句と-ed(Oの名詞句が動詞に対して受動者であることを表わす述語的要素)が緊密なペアー(nexus)を作ってそれぞれSとQに移動する、と考えた。この考えが単に受動態を派生する際に役に立って他の場合に応用が利かないものであるならば、場当りの(ad hoc)との誹りを免れないであろう。しかし実際は、この考えは応用範囲の広いものであり、動詞に対して受動者的な主語をもつ、「tough構文」等の派生に対しても必要かつ有効に働くものであるから、或る種の言語的普遍を表わすものとも考えられる。

さて、以下で受動者的な主語をもつ構文のいくつかについて位相論的に考察するが、まず難易文から始めよう。

§ 2. Easy to V と折り畳み構造

(3) They are easy to please.

(4) They are eager to please.

いわゆる「tough構文」は前者(3)の方であり、主語theyは動詞pleaseに対して受動者であるから、please themに相当する部分構造をその統意構造の中にもっている。これに対して(4)では、主語theyは動詞に対して能動者であり、they pleaseに相当する部分構造を含んでいる筈である。しかし、両者とも表層的には一見、形容詞句を補語としてもつ繫辞文(同定文)の形をしているので、ほぼ同義の単純な文(5)、(6)と生成のどの段階で別離してそうなったのか、考察してみなければならない。

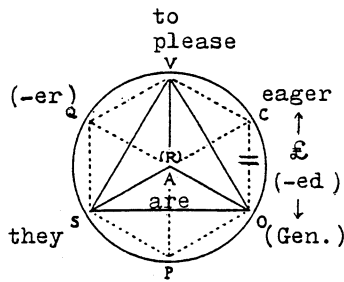
(5) They are pleased easily.

(6) They eagerly please others.

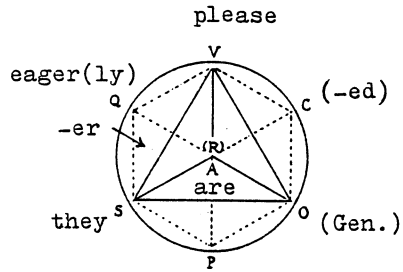
(3) (4)と(5) (6)との関係は、〈(5) (6)がもともと単純な、一つのclauseに納まる構造であるのに対して、(3) (4) は複雑な構造を折り畳んで表層的には一つのclauseにまとめ上げたものである〉という点に要約される。まず、難易文でない(4)の方から考察し、そこで得られた成果を(3)に応用するという方針で進もう。

(4) は they are eager にあたる構造と they please (Gen.) にあたる構造とが重ね合わされてきた、一種のカバン構造 (portmanteau construction) である。その統語構造を図3 aに示す。

図3 a



b



c

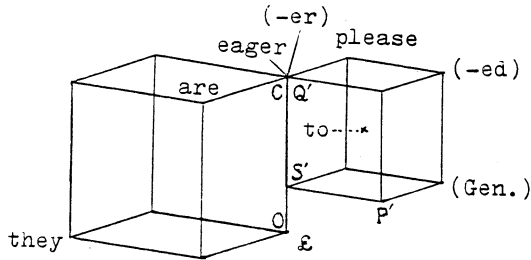


図3 aはかなり込み入っているが、もとなるのは図3 cのような複合clauseである。(主節のCと副節のQ' とが重なっているので、点接触型の複合節と呼ぶ)。Gen.というのは語彙化されていない目的語で、不特定(多数)の一般人を表わす。図cで、主節が同定文の・また副節が他動詞文の一般形をしていることはすぐわかりであろう。(4)で、副節の主張力が弱い場合は、この図cを統辞構造と考えてよい。

副節の主張力が強くなって情報の重点がこちらに移れば、副節が独立して図bの構造ができる。これは文例(6)の統語構造の一手手前である(-er + be → doの起る前)。

図aは主節と副節の主張力が伯仲した場合にできる混成構造で、同じサイズの主・副両節が重なった結果、副がもはや副でなくなり、重層的な起源の主節一個となる。Sのtheyは、Oから(平

衝子sを残して) Sに転送された同定文のthey と、P'からS'に転送された他動詞文のtheyとの合体である。「…||…」はOとCとの無関係を示す。

さて次はいよいよ本題の難易文である。文例の(3)は(4)などと違って、形容詞の後で文を切るとthey are easy. となって意味をなさない。しかし統語連鎖は(4)に近いから、統語構造も図3 aに似た図4 dが想定される。そのもとの統意構造は図4 aである。

図4

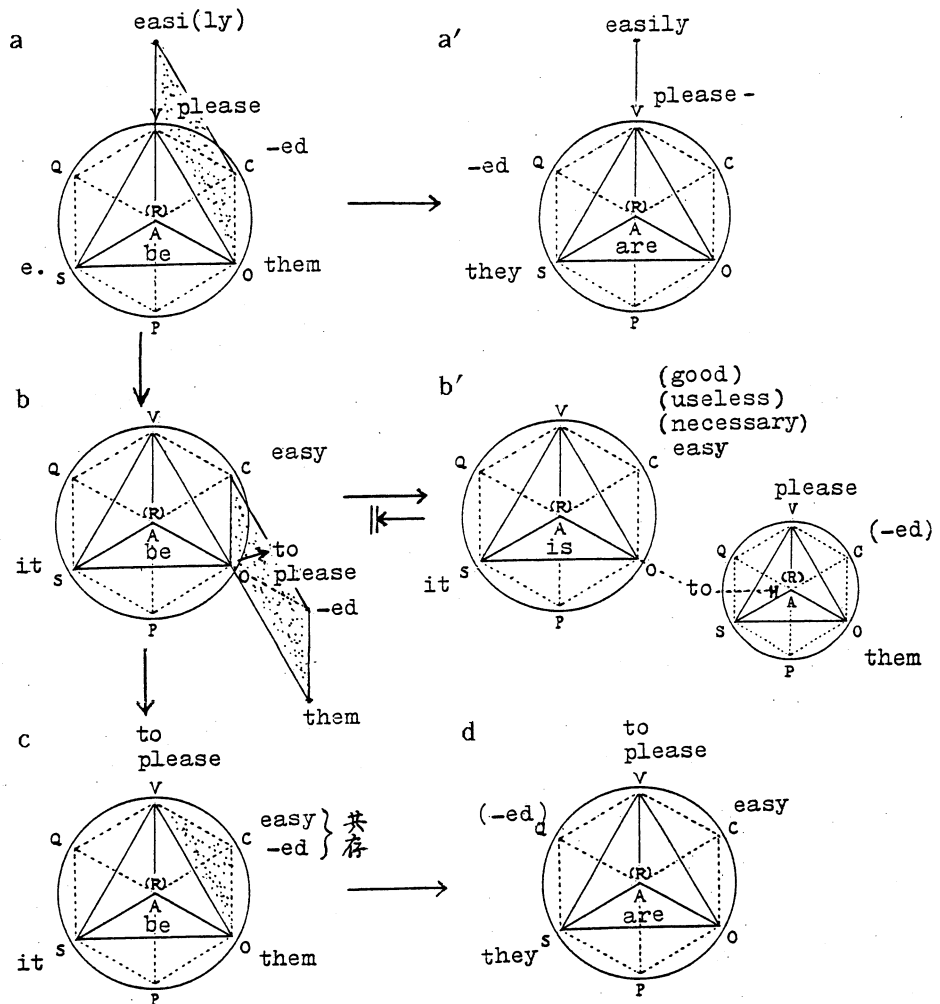


図4 aにおいて梨地で示した部分は予建構造である。稜RVの延長上、ちょうどRVと等しい距離のところに Adv(erbial)の easily が置かれている。これはVの動態語 please の様相を叙述する成分であり、V-Adv の関係はO-Cの関係と等しくなっている。いま、この構造が普通に鏡像移動を起して them が直格語化され、-ed がQに移れば a' の構造になる。これが文例(5)の統語構造である。(「NIDABA」第14号の拙論参照)

ところが、図aからもう一つ、複雑な変化の道が開かれている。それはAdvの easily を情報の focus に最もふさわしいCの位置に据えたいという、話者の表現欲求から来るものであるが、そこから次のような現象が起る。すなわち、まずaの予建構造がベクトルVOだけ平行移動して、動詞 please が名詞化され、副詞 easily がCに入って形容詞化される(こうなっても叙述・被叙述の関係はそのまま維持される。平行移動を許す意味空間の強みである)。これが図bにあたる。

ところが今度は、動詞 please に付随していた them と-ed が節からはみ出したので、もとの構造に戻ろうとする圧力が生じる。この圧力を解消するには、図b'のように、はみ出した部分を別の小clauseにまとめてやってもよい。しかしこれでは easy の叙述の対象が句 to please them 全体へと拡がって、次のような文と構造が同じになってしまう。

(7) It is good to brush teeth.

この場合に、いかに述語形容詞が easy や hard であっても、もはやここからb型への復元もc型への進展も不可能である。b'型は難易文の生成にとって袋小路なのである。

そこで、図bの予建構造が them と-ed の復元圧力によって畳み込まれて(平行四辺形から)三角形に変化し、一種のカバン構造ができたと考える。それが図cであり、一旦名詞化した please は再び動態語の座に帰り咲いたことになる。ただし名詞化の段階の残滓として to を伴っているが、この to は今や please を easy と関係づける標識となった。つまり形容詞 easy と叙述関係を維持するためには、半ば名詞的な外形が必要なのである。また、Cの位置には easy と-ed とが共存していて、新たな歪みを形成している。

最後に them(O) と-ed(C) のペアーがS・Qへ転送され、カバン構造の歪みが解消された段階、図dとなる。Q成分の-ed は読み出しに当っては黙読され、統語連鎖(3)が得られることになる。

以上、難易文の生成過程を回顧すると、この過程特有の転送や独特の畳み込み等の操作が行なわれていることに気付かれよう。その点で、いささか ad hoc との誹りを免れない面もあるが、もともと難易文というのはどの言語においても有標性の高い・出現頻度の比較的低い構文であることを思えば、ユニークな生成過程(の説明)も寛大に見てもらわねばならないであろう。しかしながら、生成途上の段階で例文(5)の統語構造(図4 a')および It is easy to please them. の統語構造(図4 b')を派生することができた点は、一応評価してもらわねばならない。

なお、図4 b'で主節のO位置に接続された to つきの副節をS位置へ転送し、虚辞 it を追放すれば、To please them is easy. などの構造が得られる。いずれにせよ述語形容詞の叙述の対象

は副節全体であるから、その中から them だけを取り出して主節の直格語に据えることはできない。さもないと、(7)から *Teeth are good to brush. という非文を生成してしまうであろう。たまたま述語形容詞が easy 等の難易形容詞の場合だけ同型の文が適格文になるのは、それらの形容詞が名詞句（副節）全体を叙述できるだけでなく、その中の動詞だけを直接叙述する能力ももっているからである。そんな能力を無視してすべてを図4 b' の型に合流させてしまうのは、有用な構造差の鑄つぶし（エントロピーの増大）であり、勿体ないことなのである。

さて、難易文の解析を一応終えるに当り、難易文において難易形容詞と不定詞句のうちどちらが主要部か、という問題を取り上げてみたい。結論を先に言うと、この点ははっきりしないのである。すなわち、繫辞 be のあとに一見形容詞句としてまとまった語群を従えているので、難易形容詞がその句の主要部（head）で、不定詞句は補助部、と見ることができそうである。しかし、NP（具象名詞とする）is easy. だけでは既述したように非文である。さりとてNP is to please. だけでも自立できない。そこで結局、easy to please の内部では主要部対補助部の関係は成立しないことになる〔註3〕。変形文法の樹形図思想、或いはXバー理論では、形容詞句（ \bar{A} ）の中に形容詞（A）があれば自動的にそれを head と見なす機構が働いてしまうが、それは決して望ましいことではない。意味的に見ても easy と please とは相互依存の関係にあり、さらには主語・およびその資格を表わす-ed とも絡んで関係網を作っている。それが本理論の主要関心事なのである。

§ 3. Good to drink などの構造

難易文と表面的によく似た文に、次のような型のものがある。

(8) This water is good to drink.

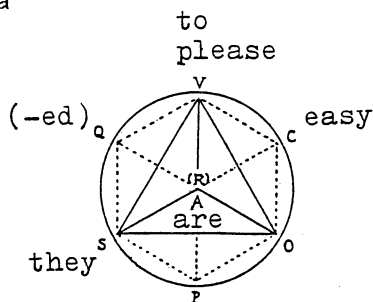
(9) She is pretty to look at.

(9) のような文を、「tough 構文」にならって俗称「pretty構文」と呼ぶ人もある。この両者は区別されなければならない。(9) では to look at は冗語に近いが、(8) で to drink を落してしまうと、this waterがどういふ点でgoodなのかわからなくなる、という情報負担量の分布の差があるからである。しかし両者とも主語が動詞の受動者であるという点で共通しており、難易文ともまた共通点がある。まず(8) から構造を考えてみよう。

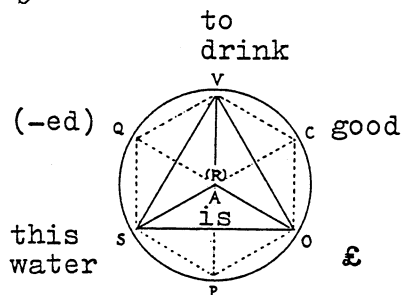
(8) の統語構造もまた折り畳まれてできた一種のカバン構造と考えられる。しかし、This water is good. が成立するだけに、難易文ほど複雑な生成過程を経ていない筈である。とはいえ表層的には難易文と酷似しているので、両者の統語構造を対照させて図5に示す。(図5 aは図4 dと同じもの)

図5のaとbを比較すると、違いは一点、すなわちbには○の位置に⊖（平衡子）が入っているだけである。この⊖は直格語化された this water の身代りであり、これを仲介として this water is good という叙述関係が成立することが示されている。一方、aにはこの⊖がない。従って、

図5 a



b



they are easy という叙述関係は成立しないことが示されている。

さて、図5 bの構造の由来は次の通りである。すなわち、まず this water (O) — good (C) のペアがO・Cに生起する。そして this water は£をOの位置に残してSへ転送される。一方それとは別に、drink(V)—ed(C)—this water(O) のトリオがV・C・Oに生起し、〈この水〉が〈飲まれるもの〉であることを表わす意味空間を作る。ついで-ed — this water がペアを組んで移動し、-ed はQに、this water はSに嵌まり込むが、重複した this water はこの位置で合体して一つになる。すべてを取りしきって陳述する繫辞と一緒に、以上の過程を経て図5 bの統語構造が形成される。読み出しにあたっては、£に音形がなく、-ed は黙読されるので、統語連鎖としては(3)と同形になる。

ただ、図5 bで動詞に付けられた to は、難易文の場合のようにこれを名詞化の残滓として説明するわけには行かないので、由来の異なる to として扱わねばならない。それは今後の課題であるが、現時点では暫定的に次のように考えておく。すなわち、good—drink は一つのまとまった意味単位を作り、そのheadはgoodである。このように形容詞と動詞が密接に関連して形容詞句を作る場合、動詞には補助部であることを示す標識が必要であり、それがtoの形で現れているのである。と。これはeager to Vの構文についても通用することであろう。

最後に、何となく心楽くなる「pretty構文」について考察しよう。(9)のto look atは冗語的成分であり、可欠成分でもあるが、しいてその役割を問えば、形容詞prettyのもつ意味的内包の一部を剩余的に表出することによってその伝達効果を高めることと、look at herなる事態が少なくとも現実に入ったことを示唆して、「she is pretty」という陳述が単なる噂や伝聞でないことを主張すること、さらには「she is pretty」という命題成立の条件・範囲を示して、場合によっては他の望ましくない性状と対比させること、などが考えられる。

とにかく、可欠成分のto look atは形容詞との結合力が弱く、また個性・具体性も弱く、特定の意味上の主語も取ることができない。たとえば

(10) *Mary is pretty for John to look at.

このようなlooseな成分とshe is prettyという主要部とが同一のclauseの中に納まっている

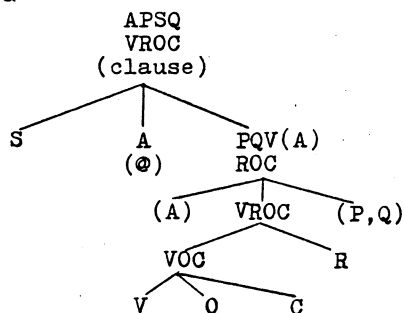
とは考えられない。従ってこの構造は、she(S)—is(A)— \emptyset (O)—pretty(C) から成る主節のPの位置に、to(H') look at(V') her(O') -ed(C') から成る副節が接続され、her(O') がダミー化して she(S) と結ばれたものと想定される。以上で、難易文と・表面上それに似た構文との解明を—まず終えたことにする。

(補説) 本理論と変形文法との関係

表題のことについてよく訊ねられるが、変形文法が形式から出発して意味を導こうとする〔形式主義の〕理論であるのに対して、位相的統語論は意味(より適切には、意味と形式の分岐点)から出発して形式を導こうとする理論である。従って、両者には直接の関係はなく、後発の理論であるとはいえ本理論は変形文法の亜流でもなければ修正の産物でもない。しかし、言語のuniversalを発見する目的にとってどちらが有利か、といえば、(個別言語によって形式はまちまちであるが、意味は共通であり得ると考えられるから)本理論のほうが良いのは当然であろう。

本理論はまた、その基本的枠組に或る人為的な視観を適用負荷することにより、その視観の写像として、変形文法の基本的枠組たる句構造にほぼ相当する構造を取り出すことができる。しかしその逆は不可能である。図6 a. bの樹形図を見られたい。

図6 a



b

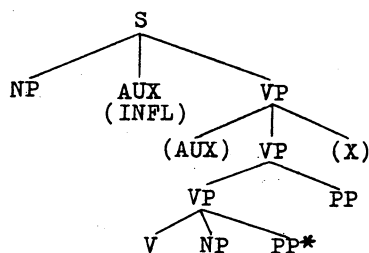
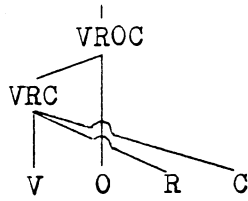


図6 aは本理論の“clause”に当て嵌めるべき人為的な集合論的視観である。単なる規定であり、考え方の鑄型と言ってもよい。後述するように、これは決して辞項間の意味的親疎関係があるがままに反映したものではない。ことに末端部のV, O, C, Rの配置は英語(およびそれに近い言語)の言語表層(語順)からのバイアスがかかったものである。そんな視観の教条的(dogmatic)な適用負荷(押し付け)により、写像(虚像或いは偶像)としての図6 bが得られる。

かつて『NIDABA』第14号の拙論で示唆したように、枝分れと辞項の配列とは本来分離すべき概念である。本理論の、意味機能素性の観点からすると、Vからの位相的距離はR, C(共有素性2個)の方がO(共有素性1個)より近い。従って、自然的には図7 aのように、Oの方がR, Cよりも早く(=上で)枝分れすべきなのである。変形文法家の覚醒を望みたい。

図7 a



b

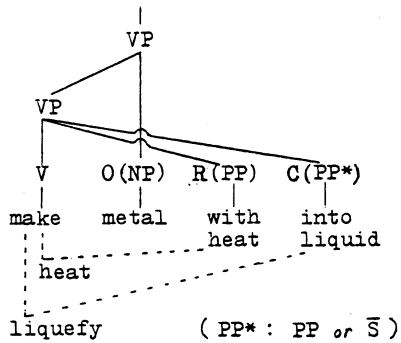
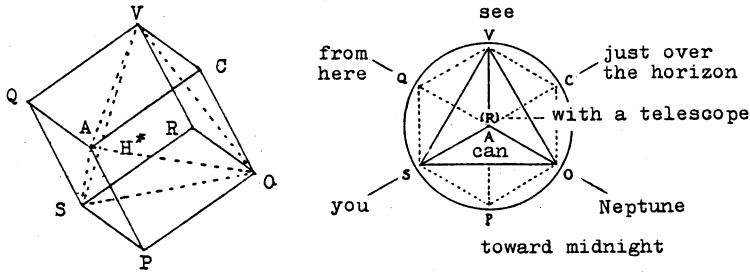


図7 bは図7 aの視観に基づいて修正した樹形図とその適用例で、関係の近いものほど一語に統合されやすいから、liquefy metal with heat や heat metal into liquid とは言えるが(註4)、make metalでは統合のしようがないのである。

(註)

1) Clause (節) の立体モデルは次の図で表わされる。(右側は適用の一例)



各面および各頂点の名称は次の通りである。

面AQVC: 動態面。 面AQSP: 状況面。 面SQVR: 過程面。

面PSRO: 名詞面。 面CVRO: 内容面。 面PACO: 結果面。

A: 叙動詞の席。 S: 直格語の席。 V: 動態語の席。 O: 対置語の席。

P: 状況語の席。 Q: 補直語の席。 R: 斜格語の席。 C: 補対語の席。

上記について簡単に触れると、叙動詞は法と時制を担う(ときには抽象的な)成分。直格語はほぼ主語、対置語はほぼ直接目的語と考えてよいが、詳しく言うと若干のずれがある。なお、O成分を従来「対格語」と呼んできたが、誤解を避けるために今回「対置語」と改めた。

2) 角田太作: 「能格と対格」『言語』1984年3月号 pp71~80 参照。また Foley & Van

Valin(1984)に多くの言語の多数の実例がある。

- 3) これはすなわち、難易文中の easy to please が形容詞句 (A P) か動詞句 (V P) か決められない、ということにつながる。しかし本理論では文成分の一義的な階層化 (部分集合化) 或いは樹形構造化の立場を取らないので、辞項群の所属が決まらなくても一向さしつかえない。
- 4) さらに make, with heat, into liquid の三者を統合した melt metal という言い方もできる。

参考文献 (既出のもの以外)

Foley, William A. & Robert D. Van Valin Jr. (1984) Functional Syntax and Universal Grammar: Cambridge University Press

A Topological Study of the "Tough" Construction and Analogous Sentences

Kaoru TAHARA

(Summary)

In the present paper we treat mainly the famous problem of the "Tough" construction from the point of the topological view of syntax. There are also treated some constructions analogous in form to the "Tough"—such as "eager to V", "good to drink", and "pretty to look at".

These constructions are all complicated in their original semantic clause structure, and have got simplified look at the surface as the result of folding two partial or whole structures into one, except the last ("Pretty") construction. The results and processes of their derivation are shown and explained in figures.